

徳川幕府が恐れた加賀藩

100万石を守り繁栄させた前田利常

徳川幕府ができたとはいえ、世の中はまだまだ戦国時代の延長にあった。そんな中、徳川幕府にとっては前田、島津、伊達の三家の動きが気がかりな存在であった。それでも徳川幕府が長く続いたのは、No2の加賀前田家が謀反を起こすことがなかったからと言える。

前田家は四男を跡取りにして生き延びる

加賀藩主前田利家は豊臣の五大老の一人、その長男が年長(羽柴年長を名のった)で、利常は四男で松平利常を名乗っていた。

*1603 徳川幕府樹立、前田家は元々豊臣の臣下であり長男の年長は豊臣を裏切ることはできない。そこで 1605 前田家は四男の利常を藩主として、豊臣から徳川へ恭順の意思を示した。

*しかし、徳川の前田家を見る目は厳しかった。前田家に本多政重を召し抱えるようにと言ってきたのだ。これに対して、利常は本多政重を筆頭家老にすえたのだ。当時は政治のすべてを家老が仕切っており、このことは前田家のことは幕府に筒抜けとなり、大変思い切った生き残りをかけた政策だった。

*1614(慶長 19)大阪冬の陣、利常は徳川方として参戦。この時も夏の陣でも大活躍をする。

謀反の疑いをかけられた利常は.....

妻の珠姫(秀忠の次女)が死去する。その後利常はお城の修理、新規の家臣の召し抱え、家臣の加増などを行う → そのような動きを幕府は何か下心アリとみた → 「幕府は加賀藩に謀反か?」とみている旨の情報が江戸屋敷から入る

↓

謀反と見なされればお家断絶取りつぶしの危機!!

↓

利常は重臣の意見を求めた

身内の家老は江戸に出て弁明すべし

本多政重は城にたてこもって籠城して戦うべし

*対応を迫られた利常は「老木は捨てよ」と、お家を守るため江戸へ使者を出して弁明させ、自らも江戸へおもむき老中に説明した。それにより疑いを解くことができた。し

かし、利常はすぐには国本へ帰らず江戸に3年もとどまることで、真意であることを体現した。

*その後幕府は各藩に対して、江戸城の修理・土木工事など命令する。いわゆる各藩の財政をひっ迫させて謀反の準備などはできないようにした。前田家にとっても大きな負担となり、藩の財政は逼迫した。

「武」から「文」へ.....これこそ生き残りの戦略

この状況に利常は果敢に政策を実行した。

①藩の会計簿を刷新した

②年貢の取り立てを村役が行う農業改革---これまでは藩の役人が当たっていたが、これだと取る側と取られる側という対立があった。そこで有力な農民に権限を与える十村制(とむらせい)を行い、監督・徴収を行った。これは、利害関係から一緒にヤローゼと言うスタイル。この農業改革を改作法と言い、一向一揆に備える意味合いもあった。その結果、収穫は104万石から128万石に増収したという。

*その後利常は文化振興を図った

御細工所という藩直轄の工房を造り、藩主の美術工芸品を作らせる。ウルシ、蒔絵、象嵌など.... → これらは將軍への献上品に

「武から文へ」への転換は生き残りの戦略でもあった。

*1616 家康は死の間際、利常を呼びこう言った「おまえを殺そうと思ったが、秀忠がウンと言わなかったのだ、それを忘れずに尽くせよ」。

つまり、家康は第二の勢力「前田利常」を恐れていた.....

NHK「英雄たちの選択」より